

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：62618

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770157

研究課題名(和文)韓国語サイツソリにおける意味構造とプロソディの方言・言語対照研究

研究課題名(英文) A cross-dialectal study of semantic structure and prosodic effect on Korean Sais-Sori

研究代表者

ホワン ヒョンギョン (Hwang, Hyun Kyung)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・対照研究領域・非常勤研究員

研究者番号：80704858

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：韓国語のサイツソリ現象は複合語で現れる音韻変化の一つであり、それに関する研究は少なくないが、リスナーの知覚・解釈に注目した研究は非常に少なかった。本研究では、この現象において、音韻と韻律情報がリスナーの知覚と構造解釈に及ぼす影響を、音響音声学的知見とともに心理言語学的実験によって明らかにした。さらに、摩擦音では平音と濃音の区別がない洛東江東部方言との対照を行い、音韻的に異なる方言間にどのような違いが存在するかを考察した。韓国語の方言の中でも珍しい特徴を持つこの方言は、消滅の危機に瀕しているため、危機方言の記録・保存の役割も果たした。

研究成果の概要(英文)：The conditions regarding Korean sais-Sori epenthesis have been extensively documented. However, the psychological reality of the conditions remained to be experimentally investigated. The current study investigated the process focusing on listeners' perceptual aspects. Further, this study included an understudied dialect of Korean which is spoken in the south eastern part of Kyungsang Province. This variety of Korean is an instructive testing ground of laryngeal contrast as it lacks the contrast between lax and tense in fricatives. This research not only enables us to better understand the mechanism of the process, but also provides linguistic data of an endangered dialect.

研究分野：韓国語と日本語の音声学・音韻論

キーワード：laryngeal contrast lax tense stop fricative compound

1. 研究開始当初の背景

韓国語のサイツリは、複合語の境界表示で、後部要素の頭 (onset) 平音 (p, t, k, s, c) が濃音 (p*, t*, k*, s*, c*) になる現象である。日本語の連濁と同じように、サイツリの適用には複合語の意味構造が条件の一つであることが知られている。さらに複雑な複合語でも意味構造が影響を与え、いわゆる「右枝分かれ条件 (Right-Branching Condition)」という制約があることが指摘されている。(連濁: Otsu 1980, Ito & Mester 1986; サイツリ: Cook 1991, 李 2004)。

サイツリが適用される条件に関する研究は少なくないが、以下のような問題点がある。

(1) 音響音声学・心理言語学的実験研究がない点: 従来は話者の直感に基づく定性的研究のみで、体系的に条件をコントロールした実験研究はされていない。従来報告された条件の実態を実験音声学的手法により検討する必要がある。

(2) リスナーの知覚や解釈の側面が理解されていない点: 人間の言語使用は、大きく発話と聞き取りの二つの面から成っている。しかし、サイツリにおける先行研究では話者の産出だけに注目したため、聞き取りの側面は明らかになっていない。

(3) プロソディを考慮していない点: 多くの言語で意味構造は複合語のプロソディと相関を持つ (Halle and Vergnaud 1987, Libermann and Prince 1977 ほか)。意味構造はサイツリという音韻変化にも影響を与えるため、サイツリと複合語のプロソディは緊密に関連していると考えられる。したがって、サイツリ研究では意味構造とともに複合語のプロソディを導入する必要がある。(4) 他方言との対照がない点: 先行研究は標準語であるソウル方言に集中しており、他方言のサイツリの実態は明らかになっていない。特に、摩擦音で平音(s)と濃

音(s*)の区別がない方言でのサイツリの実態を解明することは、対照言語学および類型論研究の上で重要な意味を持つ。

2. 研究の目的

リスナーの知覚や解釈の観点から、意味構造およびプロソディとサイツリの関連性を音響音声学・心理言語学的実験を用いて解明することを目的とする。具体的には、産出と知覚の両側面に着目し、以下の3つの課題に取り組む。

(1) 意味構造がサイツリ現象に及ぼす影響について、産出と知覚・解釈の観点から実証する。得られた結果により、複合語の境界表示であるサイツリ現象に、構造的な情報に関与しているかどうかが明らかになる。

(2) 従来のサイツリ研究ではほとんど考慮されてこなかった、複合語プロソディとサイツリ現象の相関関係を定量的な検討を行い、異なるプロソディのサイツリという音韻変化への役割および影響を明らかにする。

(3) 意味構造と複合語プロソディの影響を考察することにより、サイツリ現象の境界表示としての機能を検証することが期待できる。これは、日本語の連濁やオランダ語の linking element およびバスク語の有・無声交替のように、同類の音韻変化が存在する他言語との対照研究にもつながる。

3. 研究の方法

韓国語のサイツリは複合語の境界表示で、その音韻変化の適用条件について直感的・観察的な研究が行われて来たが、構造やプロソディのリスナーの知覚・解釈への影響および方言での実態は未解明である。そこで本研究では、ソウルと慶尚東部方言において、意味構造のサイツリへの影響について明らかにした。

また、慶尚東部方言プロソディを調べて、

プロソディのサイソリへの影響も考察した。実験語彙の選択および被験者の確保、産出・知覚及び解釈テストの実施、音響・統計分析を通して、探索的に調べることができた。

被験者は慶尚東部方言で摩擦の平音と濃音の区別がない中年・高齢層（50歳以上）を中心に実験を実施した。また比較のために若い世代にも調査を行った。

4. 研究成果

本研究では今まで注目されていなかった慶尚東部方言における音韻対立の産出及び知覚を明らかにした。その結果、慶尚東部方言の中年・高齢層（50歳以上）の話者においては、図1で示しているように、摩擦音の平音と濃音の区別がないことが分かった。さらに、その摩擦音はソウル方言の平音のような音響的特徴を持っていることが明らかになった。

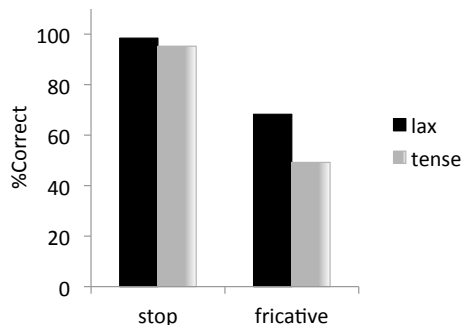


図 1：慶尚東部方言話者の弁別率

この実験結果に基づいて、韓国語のソウル方言と慶尚東部方言の音韻体系を Feature Hierarchy という理論のフレームで分析した論文を準備中である。また、この結果は次の研究課題である意味構造がサイソリ現象に及ぼす影響に関する実験のベースになった。

「右枝分かれ条件」(Right-Branching Condition) という制約は、意味構造とそれによる複合語プロソディがサイソリ現象に頻度に影響することを示している。したが

って、意味構造と複合語プロソディをコントロールした心理言語学的実験を行なった。その結果、「右枝分かれ条件」がある程度影響する傾向はあるものの、この条件がサイソリの有無に決定的に関わるということは検証できなかった。本研究では無意味語を用いたため、実験で使われた複合語の頻度や親密度の問題もあった可能性がある。しかし、日本語の連濁でも「右枝分かれ条件」は実験では検証できなかった研究がある。連濁及びサイソリにおける「右枝分かれ条件」は意味解釈には主な影響を与えない可能性がある。この結果は Laboratory Phonology 14 で発表された。

さらに、周りの子音環境が韓国語の閉鎖音及び摩擦音の laryngeal contrast の知覚にどのような影響を及ぼすかを明らかにした。弁別実験を行なった結果、図2のように、濃音が後行する場合は先行する子音の laryngeal category は平音と判断される可能性が高いことが分かった。これは韓国語の複合語境界でもいわゆる laryngeal cooccurrence restriction が存在することを示している。

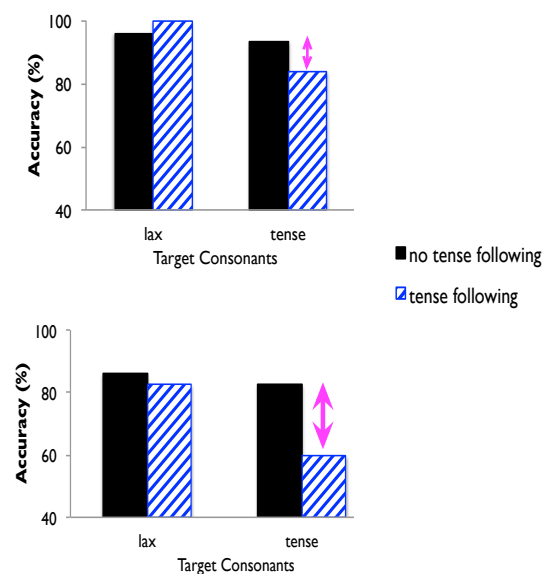


図 2：ソウル方言（上）と東江東部方言（下）における laryngeal category の弁別率。濃音（tense）の場合はもう1つの濃音が後行す

る場合弁別率が低くなっている。

この制約は閉鎖音及び摩擦音両方のカテゴリーで観察できた。また、ソウル方言だけではなく、東江東部方言でも同じ制約があることが明らかになった。この結果は **5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan** で発表された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 2 件)

(1) Hyun Kyung Hwang, 2016年11月30日.

The effect of co-occurrence restriction on perception of laryngeal contrast in Seoul Korean and East Kyungsang Korean, The 5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan. ホノルル (アメリカ合衆国) .

(2) Hyun Kyung Hwang, 2014年7月25日.

The psychological status of the right-branch condition and deaccentuation on *Sais-Sori* in Korean, The 14th Conference on Laboratory Phonology. 国立国語研究所 (東京都・立川市) .

[図書] (計 0 件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

ホワン・ヒョンギョン (HWANG, Hyun Kyung)

国立国語研究所・理論・対照研究領域・非常勤研究員

研究者番号 : 80704858